

# 印刷教材と放送教材の複合効果

——『日本政治思想』の試み——

多 田 方

## Effectively Combining Print and Broadcasting Media in Distance Education

——Report on the Study Group Project to Design  
“Political Thought in Modern Japan”——

Hitoshi Tada

### Abstract

In the educational system of the University of the Air, broadcast lectures are considered the main medium with printed text materials playing a supplementary role. However, the role of these two media are so closely interrelated that their functions must be considered together at all stages of planning, production and use.

This paper reports the design process and evaluation of a course, “Political Thought in Modern Japan”, developed by a study group with the intention of effectively coordinating the use of the two media for educational purposes. The study group included the course lecturer. In this case the results demonstrated the effective use of radio programming in guiding the students in their studies.

### キーワード

遠隔高等教育 マルチメディア 放送大学 ラジオ授業 印刷教材 教材開発 教授法

### 1. 問題の背景

放送大学における教授メディアは、放送授業、印刷教材による授業及び面接授業の三つから成っているが(放送大学学則第32条)、中核的メディアとして当初より放送授業を想定していたことは、次のような記述からはっきりうかがうことができる(下線は筆者)。

「放送大学における放送授業は、補助教材としてではなく、直接教授の役割を果たすものである。わが国の学校教育放送における従来の番組は、補助教材としての性格をもつも

のであり、直接教授番組についての経験に乏しい……」(社会教育審議会教育放送分科会(1971))。

「いわゆる放送大学の構想に関しては、既に昭和42年以来検討が重ねられており、昭和45年7月の「放送大学準備調査会」による報告書等において、放送媒体を主たる教育手段として国民各層に広く高等教育を開放するための提案がなされてきている……」(放送大学(仮称)設置に関する調査研究会議(1974))。

このような歴史的経緯にともなって、現在の放送大学はテレビ・ラジオの専用の放送局をもち、放送時間もテレビ、ラジオとも午前6時から深夜まで毎日18時間に及ぶ。また毎年新たに制作される授業番組の数は、45分番組にして各600本、計約1200本にのぼり、まさに諸外国に例をみない「放送中心」の通信制大学として現在にいたっているのである。

それでは冒頭に述べた三つの教授メディア間のウェイトづけは、現実になんてなっているだろうか。全科履習生を例にとると、卒業要件である124単位中、放送視聴と印刷教材の学習により96単位、面接授業により20単位、専攻特論(卒業研究。対面指導が主)により8単位を取得することが求められる。放送教材と印刷教材とによる学習のウェイトが圧倒的に高い。そして両教材は均等にウェイトづけられているが、求められる実質的な学習時間からみれば、印刷教材の学習に要する時間は放送教材のその数倍ということになろう(放送大学学則第31条参照)。

次に、放送大学の教授システムの根幹ともいえるべきこれら二つのメディア——放送教材と印刷教材——それぞれの役割り、機能、あるいは相互間の関連はどう位置づけられているだろうか。放送大学の規定から関連するものを拾ってみると(下線は筆者)、

「放送授業及び印刷教材による授業の併用による授業(以下「通信授業」という。)は、所定の放送を視聴しての学習及び所定の印刷教材についての学習をし……」(放送大学学則第32条2)

「印刷教材は、放送教材とともに、放送大学が行なう教育の根幹であるから、その作成にかかる基本事項については、教授会の議を経るものとする。」(放送大学印刷教材作成要領2(2))。

といったように、両教材の「併用」を謳ってはいるが、教材それぞれの性格づけ、役割り、相互関連のあり方についてのそれ以上具体的な説明はみられない。

以上、歴史的経緯、教授メディアのウェイトづけ・相互関係といった教育方法を概観してみると、放送大学が理念上も規定の上でも「放送」を主メディアとする高等教育機関であることは疑いないが、実際の学習場面では印刷教材のもつ役割りが放送に匹敵する(あるいは、それを上回る)大きさにクローズアップされてくる事実に気づく。学ぶ側からする教材内容の選好度についても、次のような興味深い調査結果がみられる。

---

<問> 全体的にみて、放送大学の放送教材と印刷教材の関係はどのようなものが望ましいとお考えですか。次の中から1つ選び○を付けてください。(%)

- |                                |      |
|--------------------------------|------|
| 1. 共に同じ内容とし、互いに重複しているものがよい     | 23.2 |
| 2. 両方の内容が異なっていて、互いに独立しているものがよい | 1.6  |

3. 放送教材を主体とし、印刷教材で不足を補うものがよい	21.5
4. 印刷教材を主体とし、放送教材で不足を補うものがよい	50.1
5. その他	3.5

(放送大学教材についての学生調査、実施時期1987年9～10月、回収有効票数1550)

主メディアとして印刷教材が望ましいと考える層が半数を超え、放送教材を主メディアとして望む層のほぼ2倍半に達している。建前上の主メディアの機能にたいする評価が、いわば逆転しており、ここから「……最近では、放送大学生の実際の学習形態が、全体として放送よりも印刷教材に重点を置いたものになっていることも特徴的である……」(岩永(1989))といった考察が引き出されてくるのは自然であろう。

論理性、抽象度が高い知識・技能を学習内容とする高等教育のレベルにおいて、言語、とりわけ文字言語(→印刷メディア)の果たす機能は基本的であるといえる。諸外国の遠隔高等教育の例をみても、先進国であると発展途上国であるとを問わず、主要教授メディアは、ほとんど例外なく印刷された教材である(B. Holmberg (1985)。また島田・秋山(1988)には、アジア、ヨーロッパ、その他19カ国、計25に及ぶ遠隔高等教育機関の現況が詳しく紹介されているが、各機関の教授メディアにかんする記述をみると、印刷教材を主メディアと明記したもの19、放送を主メディアとするもの1、明確な記載のないもの5、となっている。記載がはっきりしない場合も、ほとんどが印刷教材主体と推測できる)。印刷された教材をベースに学習が進められ、放送教材(テレビ、ラジオ、オーディオ・ビデオ・カセット)は補助的な役割りを割りふられるのが通例である。そこでの学習内容は印刷された文字の運ぶメッセージが主体であり、映像・音声メディアの役割りが補助的であることを前提に教材作成のシステムが形づくられるようにみえる。(イギリス公開大学における印刷教材、放送教材それぞれの位置づけはその適例であり、後者の役割りは学習者にたいする動機づけ、学習のペースメーカーといった程度に限定される。また、学習時間におけるメディア別のウェイトについては、多田(1987))。

これに対して放送大学の場合は、理念上も現実の学習形態上も放送の占めるウェイトがきわめて大きく、諸外国の例にみられるような印刷メディアを基本とする教材制作の枠組み(印刷→主、放送→従)をとりにくい。さりとて、映像・音声という感覚的・情緒的・非論理的で一過性の放送番組を主メディアとし、印刷教材を補助メディアとする授業形態を確立させるには、映像・音声の機能・特性・効果、さらに印刷メディアとの関連、提示技術等にかんする高度な原理的・技術的研究の蓄積が必要とされるだろう(白石(1989))。

要するに、現状においては両メディアのウェイトがほとんど拮抗しており、そのことがかえって両者の役割分担の関係を難しくしているという事情が存する。印刷教材のあり方について、「……日本の場合には全面的に放送を取り入れているだけに、印刷教材のもっている意味というのは、また他の国の遠隔大学とは違った意味をもってくるのではないか……」(天城(1984))といった指摘が夙くからなされているのも、こういった事情を裏づけている。

以上が、放送大学の教育方法における主要な教授メディア——放送教材と印刷教材——がおかれている問題状況である。教室授業とは全く異なる「孤立した状況」で学ぶ学生たちには、自ずと異なった教育方法上の配慮が必要とされる。そのためにはこれら両メディアをいかに効果的に組みあわせるべきか、遠く実験番組の時代からさまざまな実験・研究が試みられてきた(『宗教理論と宗教史』、『教育社会学』、『文化人類学』、『学校教育』、『アジアの社会』といった諸科目について行なわれている。要約説明として、島田(1988)参照)。しかし、両種の教材を統合的に制作するための一般理論あるいはノウハウといったものは、現在でも必しも明らかでない。今後もさまざまな角度から実験・研究が蓄積されねばならないだろう。

## 2. 考察の目的と範囲

本稿は、上述した視点に立って放送大学の新規開講科目から1つを選び、主として印刷教材の執筆・編集過程に参画しながら、印刷教材と放送教材との効果的な位置づけを探った作業結果の考察である。そのため、とりあげた科目の主任講師を中心に研究会を組織し、約1年にわたって検討を重ねた。印刷教材、放送教材ともに平成元年3月に完成し、同4月より開講されている。この間の経緯については、『印刷教材の研究開発——「日本政治思想」』(放送教育開発センター研究報告、近刊予定)を参照されたい。

対象科目としてとりあげたのは、『日本政治思想』(主任講師：松沢弘陽、「社会と経済」専門科目、ラジオ、2単位)である。明治の啓蒙思想から大正デモクラシーにいたる政治思想の流れを対象とするもので、「思想」という抽象度の高い概念を学習内容とする点に科目の特性があるといえる。

一般的に、多媒体教育において使用されるメディアは「相互補完的」であるべきだとされる。メディアそれぞれの特性を生かし、複合的に学習効果を高めることがその意味内容であろう。しかし、「いかに」すれば有効な相互補完が可能かについては、前項にも述べたように、確立した方法論は見あたらない。したがってここでも、先行的な実験結果を参考にしながら、主任講師・センター双方から提起される個別的な問題点を逐一検討する、いわば手探りの方法をとるほかなかった。そのさい留意したのは、次の2点である。

### (1) 印刷教材は自学自習に適するものとする

英米等の遠隔教育機関で使用される印刷教材に共通する第一の特長は、いずれも学習者の自学自習に適するさまざまな工夫(教育的配慮)が施されている点にある(多田(1987))。したがって、概論あるいは講義案スタイルが多い放送大学の印刷教材とは、構成、内容記述の点でも大きく異なっている。自学自習を可能にする具体的手法は授業の形態、併用するメディアとも不可分に関わるので、単純な模倣はできないが、放送大学の場合にも同様の配慮が求められていることは、次ページの調査結果からもみてとれる。

ここでは予習・復習型、予習型、テキスト中心型の学習者が回答者のほぼ半数を占めていることがわかる。印刷教材が「自学自習」可能であることは、少なくともこの種の学習者にとっては不可欠の要件であることは自明であろう。

＜問＞ 全体的にみて、あなたが通常行っている学習サイクルの形態は次の中でどれに最も近いですか。次の中から1つ選び○をつけてください（ラジオ科目）。 (%)

- |                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 1. 放送教材視聴の前後に印刷教材で予習・復習（予習・復習型） | 20.9 |
| 2. 印刷教材で予習した後、放送教材を視聴（予習型）      | 16.2 |
| 3. 放送教材を視聴した後、印刷教材で復習（復習型）      | 19.4 |
| 4. 放送教材を視聴しながら同時に印刷教材で学習（同時型）   | 27.5 |
| 5. 主に放送教材だけで学習（放送中心型）           | 2.1  |
| 6. 主に印刷教材だけで学習（テキスト中心型）         | 10.4 |
| 7. その他                          | 3.5  |

(148ページ所掲の学生調査)

(2) 放送教材では印刷教材の「棒読み」をしない

放送大学の放送授業（テレビ、ラジオを問わない）にたいする学生の不満点のうち、とりわけ多いのが印刷教材の「棒読み」批判である。いくつか列挙してみると、

「印刷教材の朗読のような型ではつまりません。印刷教材をさらに肉づけするような、あるいは、深く説明するような放送教材なら受講しなければ困ると一生懸命に聞くでしょうが、聴いても聴かなくてもテキストを読めばいいような放送では聴かなくなってしまう。」

「講義をただ読み上げているだけの形式の先生がおられましたが、学習する側から申しますと、どこがポイントなのかおさえるのがむずかしく、また単調で眠くなってしまい……」

「放送授業の内容は印刷教材の内容のコピーではなく、別の視点から同じ問題を追究するものよと思う。」

(大塚雄作他 (1987))

前述したように印刷教材の多くが概論あるいは講義案タイプである点、両教材の作成スケジュールの先後関係（印刷教材の原稿がまず先に書かれ、それにそって番組が制作される）、さらに放送時間と印刷教材のページ数の関係（標準的な分量の場合、後者の読み上げに要する時間は、前者にかなり近い）といった事情が重なり、「棒読み」への心理的傾斜を強めているのかもしれない。

音声教育メディアとして代替不可能なすぐれた特性をもつことには、後でふれる。「棒読み」は一旦抽象化された文字記号をそのまま音声に置き換えたにすぎず、多媒体教育における一方のメディアの機能を空費していることになる。いかにして「棒読み」を避けるかは、ラジオ授業の改善を考えるさいの基本的な視点の一つと思われた。

### 3. 考 察

2で述べたように、当初の目論見は「自学自習に適した」印刷教材、「棒読みを排した」放送教材という、限定はされているのに具体的内容が不明確なものであった。しかし、研究会と作業を重ねる過程で、検討さるべき問題点が次々に現われ、拡がり、発展して、新

しい視点、枠組みの発見につながるが多かった。それらはいずれも完成された両種の教材の中に生かされているわけだが、ここでは執筆開始前に作られ、全体構想を決定する役割りを果たした<検討事項>（末尾、資料1）、本文執筆後に書かれた「まえがき」（同、資料2）、授業全体の狙い、枠組みを明らかにした「序論」、さらに本文の一部の記述等を手がかりに、印刷教材、放送教材の特色を考察する。次いで「自学自習」「棒読み」にかんする当初の目論見と対比し、最後に学習者たちによる評価（アンケート調査）にふれることにしたい。

#### （1）考察の視点

先駆的な視聴覚教育研究者 E・デールによれば、総合的・組織的な教え方を上手に行なうには、① who、② whom、③ why、④ what、⑤ how、⑥ when、という要素を巧みに総合することにあるという（E・デール（1957））。本科目の場合、①と⑥は所与であるので除く。残った4要素は教材を考える場合のもっとも基本的な視点にそのままつながる。

① whom—対象

② why—目的

③ what—内容

④ how—方法

##### ①対象の想定

印刷教材を構想する場合のもっとも基本的な視点であり、②とも不可分に関連する。「18歳から80歳」にわたり、多様な社会経験・知識・技能を有する放送大学の学生中、どういった層を対象として想定するかは、新規開講科目である事情も加わり、当初より主任講師を悩ました難問題であった。研究会の第1回目の大半もこの種の議論に費やされた。

結論として、「42歳、高卒、家庭の主婦、現実の政治に関心あり好学心にとむ」という想定がなされた。したがって末尾に掲げた資料<検討事項>は、この想定を前提としてつくられたことになる。

しかし、現実を受講した学生たちの属性は想定と大きく異なり、男性が圧倒的に多く、年齢幅もきわめて広いという結果になった（平成元年度第1学期、167ページ、アンケート結果参照）。新規開講科目の場合、想定が期待・願望に偏りやすいということであろうか。関連する既開講科目の内容・レベル等の調査にもとづく推定の方がより実態に近くなるのかもしれない。

##### ②目的の提示

遠隔・多媒体を手段とする授業であることは「まえがき」で明らかにされる。

講義全体を通じるねらいは<検討事項>では個条書き風に示されているが、印刷教材では「序論」（放送第1回分）のすべてが授業目的の具体的説明にあてられた。たとえば、  
「豊かな経済と貧しい政治、政治の貧しさと政治における思想の貧しさ——日本の外からの診断」  
「日本人の自己認識」  
「中江兆民の場合」

「大山郁夫の場合——大正デモクラシーの中で」

「政治の理論の創造と政治の変革」

「思想と人と時代」

といった小見出しからも容易に推測できるように、現代の視点から日本の近代政治思想を学ぶ意味を、興味深い資料の原文を引用しながら簡潔・明快に解説している。学習者にたいする動機づけ、学習にたいする誘いとして、内容的にも分量的にも十全の配慮がなされているといえよう。

さらに、思想家たちがきずきあげた政治哲学と、それらが政治の現実の中で果たした役割りとを、(1)普遍的な原理と具体的な状況、(2)普遍的原理と利益の要求、(3)相異なる自己利益間の一致の可能性、(4)議会政治、(5)大日本帝国憲法、といった課題とつねに関連させながら考察していくことが説明される。全体を通ずる主任講師の講義の枠組みが立体的に示されており、講義の目的にたいする学習者の理解を容易にしていることがみてとれる。

### ③教材の内容

全体構成は、印刷教材の目次にみられるように、近代日本政治思想にかんする骨太な通史である。(民主主義思想に限定される。因みに、この領域における信頼できる通史は、現在のところ存在しない。)全体の案内にあてられた序論を除き、全6章、22節から成り、まえがき、史料・研究文献・史跡案内、索引が付く。

他の多くの印刷教材の場合と異なり、章立てが放送回数と対応していない。全15回の講義でとりあげる思想家は10人であり、通史としての体系性と個々の放送内容の関連づけにかんする主任講師の苦心が推測される目次の後に「放送と本文の対照表」が付されており、放送回数に合わせて無理に15回均等の章立てにする必要のないことを示している。

「序論」の末尾「思想と人と時代」において、本教材では、思想史をたどるのに概念や理論を主語にして書くゆき方を排して、思想を担った個人を主語にするゆき方を採った、と説明される。10人の個人を中心にして、「一人の個人がある時代に生き、政治とかかわる中で、政治についての思想をどのようにきずいていったかに焦点をあてたい。その方が、先人の思想を理解することが、また彼と時のへだたりをこえて対話することが容易になると思われるからである」とする。具体的な思想家個人を主語とするこの方法は、遠隔学習者に内容にたいする親近感をもたせ、興味を刺激する有効な方法であるといえよう。

上述したように、放送回数ととり上げる思想家数にはズレがあるが、個々の思想家を分析する切り口(視角)は共通している。「まず、彼らの時代とそこでの生き方という背景を見、その上で、彼らの政治思想を考えることにしたい」とし、各章では、その時期の政治状況と思想的課題、思想的課題の継承関係、その時期における思想家の生き方・考え方、個人史における思想的影響、最後に政治思想、といった順序で検討が行なわれる。簡潔・明晰な文章で描かれた読みやすい通史の体裁をとりながら、きわめて意識的に構成され、構造化された内容をもつ教材になっていることがみてとれるのである。

### ④教材作成の方法

＜検討事項＞を概観すると、教材における内容と形態とが分かちがたく関連しあい、教授内容を考えることと形態上の工夫をイメージすることとは、ほとんどパラレルであるこ

とに気づく。この＜検討事項＞から学ぶべきは、まず印刷教材、放送教材を同時に、しかも同一平面上でとりあげ、科目に適合する効果的な関連手段を提示している点にある。ここに列挙された諸点はほとんどすべて実現されたと判断できるが、ここではとりわけ学習上効果があると思われる工夫点についてふれておきたい。

(a) 学習のしかたの助言 「まえがき」に明記したように、印刷教材を通読した上、各回の分を再読して後で放送を聴くよう求めている。本科目の場合、この方法がきわめて有効であることは後述するが、このように学習方法の指示が具体的に示されることは、他科目の場合、稀である。

(b) 関連科目へのリファー 本講義を聴くための予備知識を提供するような科目は、基本・基礎、専門を問わず開講されていなかった。しかし、偶々同時進行していた「日本政治史——外交と権力」、「憲法概論」の校正刷が借用閲覧でき、「まえがき」に紹介することができた。

(c) 資料原文の引用 とりあげた思想家の著作から紙幅の許すかぎり多くの原文を引用した。ごく限られた部分にせよ原文に接することの学習上の意味は大きく、さらにあるものは朗読され、放送番組にとり入れられた（たとえば、『福翁自伝』、『文明論之概略』、『Contrat Social』、『民約訳解』、『三酔人経綸問答』、田中正造の直訴状、など）。

(d) 演歌・労働歌の収載 各時代の民衆の意識を表現するものとして政治演歌・労働歌を選び出し、放送各回の終りに収載した（たとえば、「民権かぞへ歌」、「よしや武士」「帝国議会の歌」、「代議士」、「無茶苦茶節」、「あゝわからない」、「社会党ラッパ節」、「デモクラシー節」2種、「労働問題の歌」、「メーデーの歌」）。

(e) 風刺画・政治漫画の収載 (d)と同じ趣旨で、時代を風刺する卓抜な漫画を8点収載した。これらもテキストの一種とみなされ、後述するように、主任講師による興味深いメッセージの解説が行なわれた。

(d)(e)のもつ意味については、末尾資料「まえがき」の中に、主任講師による達意の解説があるので、参照されたい。

(f) 思想家の肖像写真の収載 とりあげた思想家全員の肖像を選び出して収載した。特定の時期、特定の場所における思想家の姿は(e)と同様、一つのテキストであり、これらについても放送において主任講師による解説が行なわれている。

次に、放送教材にかんする工夫について概観する。

ラジオは音と声とを複合した伝達媒体である。そして音声刺激中もっとも普遍的な様式は、話し言葉 (spoken word) と音楽 (music) である (D.J. Power (1987))。さまざまなイントネーション、抑揚、リズム、テンポ、音色、音量、高低をともなった肉声あるいは音楽は、活字の字面から運ばれる抽象的な説明とは異なり、学習者の思考・感情を強く揺り動かす効果をもつ。

上述した④(c)(d)は、それぞれの分野の専門家によるナレーション、歌唱であり、資料原文、歌詞の内容、主任講師による解説と相まって、学習者に深い印象をもたらすものと推測される。次に掲げる「よしや武士」は植木枝盛を扱う第2章第2節で歌われるもので、



発祥地高知の芸妓による実演、郷土史家による時代背景の説明、作曲家による解説等が重なりあって、興味深い放送時間を構成している。しかし、それら複合する効果を紙上に復元する術はない。ここでは主任講師による講義がいかにか印刷教材の内容を補完し豊かにしているか、その一部を紹介するにとどめる。

「今日は最後にもう一つお聞きいただきたいと考えておりますけれども、「よしや武士」という歌がございます。この歌について高知にお住いの近森敏夫さん(郷土史家)の解説の中で今申しました事情について詳しくふれていらっしゃるようです。今回の講義の展開を考えまして、ここで先回りになりますけれども、近森さんのご解説にそった私の感想を一言申し上げておきたいと思います。「よしや武士」の作詞をしました安岡道太郎という人は作家の安岡章太郎さんの一族になります。ご存知かもしれませんが、安岡章太郎さんには『流離譚』というタイトルの本がありまして、大変な傑作でございますけれども、これは幕末から自由民権運動の時代にかけての安岡一族の歴史であります。近森さんの高知藩から立志社に至る運動の歴史のご説明に重なってまいりますので、一言ふれておきたいと思います。

(中略)

いろいろ考えられますでしょうけれども、私はこの講義で注目したいのは、植木が福沢の非常に豊かな政治思想から受け継いでおりながら非常に大事なものを受け継がなかった、取りこぼしがあったのではないか、ということ

ことであります。福沢諭吉は、自由独立ということを問題にいたしました。しかし、彼の特長はそれをあらゆる人間関係について問題にしたわけであります。植木はそれを政府に対する自由独立にいわば狭めてしまいました。それをよく示しますのが、最後に歌っていただきたい「よしや武士」であります。「よしや武士」は自由民権下に共通する気分を非常によく示しているように思われます。

お読みになっていただくとすぐわかりますけれども、この歌詞はいわば二重構造になっております。第一節は、「南海苦熱の地」であります。これは土佐の高知と、その高知の遊廓とをにかけているわけであります。第三節「よしや憂身にアラビヤ海も…」これは遊廓に売られた女の人が、自分の身の上を嘆いているのであります。問題なのは最後の第四節「よしやシビルは…」であります。シビルは市民的な自由独立、ポリチカルは政治的な自由独立であります。第四節で訴えておりますのは、政治的な自由独立、政治批判、政治参加は民権運動によって実現された、あるいは実現されようとしている。しかし、政府に対する関係以外での、市民と市民の間での自由独立は後回しにされてしまった。子供は親の権力の、あるいは親の横暴から自由独立になっていない。つまり親

○よしや武士	明治十年 土佐立志社青年組 安岡道太郎作
よしや南海苦熱の地でも	粹 <small>いき</small> な自由の風が吹く
よしや此身はどほなり果てよ <small>はそ</small>	国に自由がのこるなら
よしや憂 <small>うれ</small> 身にアラビヤ海も	わたしや自由を喜望峠
よしやシビルはまだ不自由でも	ポリチカルさへ自由なら

に売られて遊廓に身を沈めているわけであります。女性は男の権力から自由独立になっていない。民権論の青年壮士と、花街の女性の間には自由独立な関係はまだ存在していないわけであります。そして、これを歌っている女性は、そのようなシビルな自由独立が、まだないということを諦めて、それを甘んじようとしているように思われます。

この歌の歌詞や、あるいはメロディーからは、まだまだいろいろな問題が汲み取れるかと思いますが、この程度に止めておきたいと思います。」

(e)(f)は、視覚的な漫画、写真に隠されたメッセージが主任講師の肉声によって顕われてくる過程であり、これも学習者に強い興味と刺激を喚びおこす工夫の一つといえる。それぞれについて事例を掲げてみよう。

まず、政治漫画。第2章第1節の冒頭「啓蒙思想の伝播と自由民権運動」に左のような漫画が掲げられ、放送授業の中では次のような解説が行なわれる。



本多錦吉郎「街頭猿説」『団々珍聞』(1879=明治12=年2月) 演説が猿まねのようにしているという諷刺。民権壮士が植木枝盛作「民権数え歌」を演じる。

「次に50頁の漫画を見ておきたいのですが、この漫画は現物の3分の1ぐらいの小さいものになっておりまして、迫力が少し薄くなっておりましても、この漫画一つから自由民権運動について、文字では表現できない、色々なメッセージが読み取れるように思います。この漫画についての説明は絵の下にキャプションで書いておきましたけれども、本多錦吉郎という専属の風刺画家の名前と「街頭猿説」というタイトルとそれ

に漫画自体の左下の隅に Political street-lectures in Tosa. というふうにあります。明治12年、1879年頃の土佐、高知県のありさまを非常によく示しているように思います。

左の方に立って「民権かぞへ歌」を歌っておりますのは、民権運動の壮士、今で言えば活動家であります。聞いている人々は農村ではありませんで、町中かと思えますけれども、皆まだ、ちょんまげを結っております。ですから文明開化の身なりをしました壮士とは非常に対照的です。聴衆の左端には子供をおんぶした女の人まで姿を見っております。

お気づきになりにくいかもしれませんが、画面の真ん中に提灯がぶら下がっております。この提灯の図柄がまた一つのメッセージでありますけれども、おわかりになるでしょうか。セミは、これはミンミンゼミでありまして、これに槍の刃先が向けられております。ミンミンゼミは民権派のギャグであります。つまり御上、政府の役人にとっては民権運動というのは、民権、民権とやたらに鳴いてうるさい、だからミンミンゼミだというふうにとるわけであります。このうるさくてしょうがない民権派を退治しよう

と、政府の弾圧が加えられている、そういう政治情勢をこの図柄は象徴しているわけがあります。

この漫画からのメッセージをもう一つ考えてみたいと思いますけれども、『団々珍聞』という新聞は、1877年、明治10年に創刊されました。新聞とは言っておりますけれども、風刺専門の雑誌であります。そして風刺と言いましても、もっぱら政府を批判する政治的な風刺専門であります。政府の言論弾圧が非常に厳しくなっておりますので、政治論文を書きますと、すぐに発売禁止になります。そこで、政治的な社説、論説を書く代わりに風刺的な戯文を書いて、主にパロディでありますけれども、これで政府を風刺する。併せて風刺漫画で対抗しようというわけでありまして、これは自由民権論の別動隊のような雑誌であります。自由民権運動の発展とともに、売上が非常に伸びたそうでありまして、同時に自由民権思想を広める上での非常に大きな役割を果たしました。

長くなりましたけれども、「民権かぞへ歌」という一つのヒットソングと、それに非常に緊密に結び付いた一つの政治的な風刺漫画をとりまして、天賦人權、自由民権という普遍的な思想が、字が全く読めないようなちょんまげの庶民でありますとか、あるいは非常に柔かい花街の芸者さん達にまで、話しことば、そして漫画というメディアによって伝わっていったということ。そういう政治についての普遍的な原理がこれだけ広がって、そして運動になったということ。自由民権の時代がそういう時代であったということを少し考えてみました。」

次に、思想家たちの肖像写真について。第3章第2節「徳富蘇峰と平民主義」に掲げられた若き日の蘇峰の写真について、講師は次のように解説する。

「……その蘇峰がジャーナリズムの世界に登場したのは、彼が22～23才のころであります。熊本にいた無名の青年が突然東京に出てきて旗上げをする。ベストセラーを刊行し、ひきつづいて、それまでになかった新しいタイプの総合雑誌『国民之友』を刊行する。これが社会に大変な衝撃を与えたわけであります。

その出世作になりましたのが、85頁の2行目に引いてありますけれども、長いタイトルの論文ですが「第十九世紀日本の青年及其教育」という論説であります。

(中略)

この1885年と86年の2年にわたりまして、2冊の出世作を彼は刊行いたしました。まさにその間に撮りました写真が84頁に出てまいります写真であります。私はこの写真が論壇にデビューするころの青年徳富蘇峰を非常によく表わしているよう



徳富蘇峰 (1886＝明治19＝年夏、東京に出ての旗上げを企てて上京の当時。23歳)

『蘇峰自伝』(中央公論社)より

で、大変好きであります。先ほど申し上げました「第十九世紀日本の青年及其教育」がすでに大変な評判になっておりました。それで熊本から東京へうって出ることを思い立ちまして、すでに『将来之日本』の原稿ができていますけれども、それを携えて東京に出てまいりまして、東京に足場をきずく可能性を探っているわけであります。

まさにその時の写真であります。服装は田舎の青年そのものであります。しかし、表情にも姿勢にも非常に若々しい闘志と緊張感がにじみ出しているように思われます。

東京に進出しまして第1作が『将来之日本』でありますけど、大変売れました。この時蘇峰は23才であります。現在22～23才と申しますと、大学を卒業するかしないかの年代でありますけど、大変若い時の作品です。さらに内容が問題であります。当世の若者文化、文学作品と違ひまして、『将来之日本』の内容は、まさに「将来の日本はどうなるのか、どうなるべきか、どのように改革すべきか」といったテーマで、大変スケールが大きいわけであります。柔いか堅いか、と申しますと、いわゆる「堅いもいいところ」であります……」

これらの他に、「序論」（放送第1回）において、著名な外国人ジャーナリストと主任講師の対談を通じて、講義全体の狙いを明らかにする試みがなされている。英語によるやりとりをバックに同時通訳を重ねながら行なわれた討論は、方法の意外性もさることながら、明治・大正の政治思想が現代の政治・国際関係とも分かちがたく関連することを明らかにし、新鮮な導入部となっている（因みに、対談内容は印刷教材に収載されていない）。

これらの試みは、いずれも「……視聴覚教育を有効に展開するためには、言葉を適切に利用すると共に、ひとつの教具、教材をいろいろな面から活用し、さらに多くの教具・教材を総合して、いっそうその機能を発揮させることが肝要である。」とするE・デールの見解を裏づけるものといえよう（E. デール（1957））。

以上は、メディアとしてのラジオの特性を生かした試みであるが、放送ではその他にも学習支援のためのさまざまな手段を講じている。放送各回の冒頭でその回の主題と議論の展開を説明するとともに、講義の中でその回の位置づけと前後の回との関連を説明する。継承、発展、反逆、あるいは平行、重複といった思想の複雑な流れをできるかぎり正確に理解させるための配慮であろう。第2章「自由民権論の政治思想」の中から例を拾ってみると、

「そういう思想の継承という関心から見てまいりますと、明治の啓蒙思想から自由民権論へという発展は、非常に興味深いわけであります。いま申しました、第1節のタイトルにも示しましたし、第1節および第2節の内容全体を通じまして、この点を描き出すように注意いたしました。明治の啓蒙思想と自由民権論とは、思想の継承と反逆という、ある意味で矛盾するわけでもありますけども、両面の関係が非常に顕著なわけであります。そういうわけで、明治の啓蒙思想と自由民権論とは切り放しにくいわけでもありますけれども、それにもかかわらず明治10年、1877年を自由民権論の初めにいたしました。

（中略）

今回も、最初に第2章全体の構成をまず簡単にご説明しておきたいと思います。第1

節ではこの時期の政治状況とそこでの思想的な課題を説明いたします。それを受けまして、第2節と第3節では、代表的な思想家として、植木枝盛と中江兆民を取り上げることにいたします。第1節の結び、つまり教材では52頁になりますが、52頁ではこの2人のほかに田中正造についても自由民権論との関係に触れております。この、52頁の部分は第4章から先への、後の方の章への伏線にもなりますので、すこし補足しておきたいと思います。

(中略)

今回は第2章の第1節と第2節とを取り上げることにいたします。まず、第1節のテーマと構成について簡単にご説明いたしまして、その上で印刷教材の補足としまして50頁に入れておきましたけれども、風刺漫画が一つございしますが、それと参考資料として挙げました「民権かぞへ歌」を歌っていただきまして、両方併せて考えることにいたしましたと思います。第1節は49頁から始まりまして52頁までありますけれども、その中の初めの部分、49頁から50頁までは明治の啓蒙思想という、譬喩的に言えば父から自由民権運動という後継ぎが生まれてくる過程を描きました。この過程につきまして、まず社会史的なスケッチを行います。さらに、その上で自由民権運動がどのような活動をしたかということについて、簡単にふれておきました。」

講義で扱われるキーワードは、印刷教材の中でなければ放送の中で、洩れなく詳細に説明される（たとえば、文明開化、啓蒙、革命、独立、封建門閥、会社、实际的の政論、普遍的な原理、志士仁人、自然法、等々）。また、本文の重点的な内容の補完説明のほか、興味深い挿話の類いが随所に紹介されて、テキストの理解を援けている。

## (2) 当初の目論見と対比して

一般的に遠隔高等教育における「自学自習」用教材の要件として教育工学者が掲げる項目は、次のようなものである。

「(a) 図、表、レイアウト等の入れ方

(b) 小見出しづけ

(c) 箇条書きなどで印象づける

(d) エピソード、興味をそそる話などのコラム/囲み

(e) 道案内の章、進行表、中間のまとめなどの配置

(f) 章の進行予定（内容）を予めわかるようにする工夫

到達目標提示（冒頭）、本章のねらい・ポイント、めあて、全体の中での位置づけ

(g) 用語解説（巻末）ないしキーワード提示（章のはじめ）

(h) 参考文献の解題

(i) 放送台本のような、ここで画面を見よというような指示（テレビ）

(j) 太文字、活字の大きさ、字体等への配慮

(k) Work book 式の構成

まとめのための問題」

(大学放送教育学習方法研究会 (1983))

これらはいずれも、イギリス公開大学やドイツ遠隔大学の印刷教材類、アメリカ大学教

科書とスタディガイド類、さらにわが国私立大学通信教育協会における豊富な研究資料等の中につねに共通して現れる項目であり、学習心理学上、教育工学上、有効性がすでに検証された要件と思われる。

『日本政治思想』の印刷教材は、一般市販にも適した体系的な通史の体裁をとっており、上に引用したような項目は明示的には見あたらない。しかし、(1)で詳しくみたように、学習者の自学自習を支援する種々の試みは印刷教材の中に目立たない形で組みこまれ、明確に構造化された構成・内容になっており、必ずしも上記の諸項目が明示的にとり入れられる必要のないことが理解できよう。「自学自習」に充分耐える内容と敘述であり、この上に放送教材を重ねあわせることにより、学習効果が飛躍的に高まることが容易に推測できる。

放送教材では、「棒読みを排する」という当初の意図はほぼ完全に実現されたといえる。同一の主題を扱いながら、放送がいかに異なった視角から印刷教材の内容に光をあて、補完し、高め、活性化しているかが前出の諸引用からみてとれる。両メディアの機能が無駄に重なるのではなく、それぞれの特性を生かしつつ複合的に組みあわされた一つの好例であるといえるのではないか。

### (3) 学習者による評価

以上はいずれも教授側からする試みであったが、それでは実際に学習する立場からみて、これらはどのように受けとられ、かつ評価されているか。以下に使用する調査結果は平成元年6月（第1学期の中ごろ、放送第8回の前後）に全受講生にたいして行なわれたもので、内容は理解度または興味関心度について被調査者が主観的に判断する方法が中心である。末尾、資料3の質問内容と回答状況（単純集計）を参照されたい。

Q1では、「だいたい理解できる」以上が74パーセントに上る。教材の難易度は学習者の予備知識・予習能力により可変的で、一概に判断できないが、「政治思想」という抽象度の高い学問内容から推して、この数値はかなり高い理解度であるといえる。「理解できない点」が何であるか、知る必要があるだろう。

Q2をみると、教材の分量を「適当である」とする層が76パーセントを占める。科目の性格上、本文中に資料原文を多く収載し、さらに歌詞、漫画、写真等まで収録した結果、標準の2倍近いページ数に達する結果となった。にもかかわらず上記グループが4分の3を占めた事実は、科目特性、授業内容などと分量の関係についてある程度柔軟に考える必要があることを示唆していると思われる。

(1)では、政治漫画、肖像写真の収載と解説、資料の朗読、政治演歌の実演といった工夫について、筆者（多田）の主観的な印象を記述したわけだが、ここでは学習者の側からの反応・評価を求めた（Q3、Q4、Q8、Q9）。大方が肯定的であることがうかがえる。

Q5、Q6は、本印刷教材とは直接関係のない一般的な質問内容である。印刷教材に専門用語の解説を求める意見、また放送教材では印刷教材中の重点項目にかんする解説を求める層が多いことがわかる。

Q7は、受講の前提となる学習情報源にかんする質問であるが、意図がやや不明確だった。しかし、印刷教材の「まえがき」あるいは「序論」等で詳細な説明が必要とされるこ

とは、(b)(d)からも明らかに読みとれる。

Q 10では、放送・印刷両教材にかんする全般的な感想を求めた。(a)(b)の合計はほぼ75パーセントに達しており、全体として肯定的・好意的な評価が得られたといえるのではないかとはいえる。

(当初予想した学習者の属性が、回答者のそれと大きくく違った点については、150ページにふれた。)

以上、教材作成以前に作られた〈検討事項〉、印刷教材の本文執筆後に書かれた「まえがき」「序論」、本文の一部、さらに受講生調査の結果なども援用しながら、印刷教材、放送教材の特長点、相互関係について考察をおこなってきた。しかし、それらはいずれも筆者（あるいは受講生）の主観的・定性的な感想の域をこえてはおらず、また両メディアの複合された効果についても、活字化された放送の一部を提示して判断を求めるにとどまり、客観的な評価とは言い難い。分析方法の手がかりすらつかめていない感が強いのである。この間の事情について次のような記述がある。

「……印刷物と教授メディアとの併用の効果の高いことは周知の事実である。ただここで注意を要するのは、教授メディアの利用効果を測定するための適当な評価方法がないということである。一般に学習の評価はほとんどの場合、言語を用いるテストに頼るため、言語的教育の効果と教授メディア利用の効果とを客観的に比較しにくいのである。」（細谷（1980））

とすると、明確な評価を拒む原因はメディア自体に内在することになり、多媒体教育における教材評価につねに「あいまいさ」がつきまとうのは当然ということになるのだろうか。

#### 4. むすび

『日本政治思想』の印刷教材、放送教材の内容は、無駄に重なりあうことを避け、双方のメディアの特性を生かし、効果的に補完しあって学習効果を高めるように工夫されている。学習者の自学自習を援けるよう意識的に構成・記述された印刷教材が一方にあり、他方、その構造を指し示し、内容を補うとともに、音声メディアの特性を生かして教授内容を活性化する放送教材が対応している。冒頭に述べた二つのメディアの位置づけという視点からすれば、両教材の関係は充分「相互補完的」であるが、実質的には、むしろ印刷教材が主教材で、放送教材が「学習手引き」(study guide)の役割りを果たしているというべく、学生たちの選好度(148ページ)とも一致する結果となっている。

このような両教材の位置づけはわかりやすく、今後のラジオによる放送授業の開発に一つの方向性を示唆するものと思われる。エスカルピによれば、

「……映画、ラジオ、テレビジョンが演ずべき役割をもたないというのではない。まったく逆で、それは知らせ、目を醒させ、本よりうまく問いを提出する。しかし人が自らに与える解答を発見することを許すのは本だけである。それは、本が各自の時間を尊重するからである。読者は時を支配し、自分の尺度と自分のリズムに応じて世界を再創造する。……」(R. エスカルピ (1988))。

遠隔教育における印刷メディアと放送メディアのあるべき関係をも示唆した適切な指摘

というべきであろう。

- \* ラジオによる放送授業の役割りをスタディガイドとして捉えると、イギリス公開大学におけるラジオ番組の機能、番組分析の方法などが参考になる。そこではラジオ番組は印刷教材にたいして補助的な役割りをふられ、位置づけが限定されているので、果たすべき機能がかえって明確に例示されている（H. Grundin (1984)）。

遠隔高等教育における印刷メディア研究の重要性について、くり返す必要はないだろう。ここではむしろ印刷メディアとの関連におけるラジオ授業研究の必要性を強調しておきたい（ラジオ科目は放送大学の全開講科目の半数を占める）。最近の放送大学学生調査によると、テレビ講義、印刷教材にたいする評価が高く、通信指導、ラジオ講義にたいする教育評価は相対的に低いという結果が出ている。そして、とりわけラジオ講義にたいする若年層の評価が著しく低い点が指摘されている（岩永（1989））。これは必ずしもメディアの特性差だけに起因するものとも思われず、むしろメディアの位置づけ、活用方法といった点の検討不足が原因なのではないか。『日本政治思想』における両メディアの位置づけ、補完関係は、上述した現状を改善するためにも、一つの有効な参考資料となりうるはずである。

また、152ページで、「執筆開始前に作られ、全体構想を決定する役割りを果たしたく検討事項>」（末尾、資料1）と述べたが、その意味を少し詳しく説明しておきたい。ここで決定的に重要な点は、印刷教材、放送教材それぞれに盛りこむ内容について、印刷教材執筆以前の段階で、同時に、相互関連にいたるまで仔細に検討する場がもたれたということである。印刷教材の執筆だけが先行すると、前述したように、放送が「棒読み」に陥りやすい。両メディアの位置づけ、関連にかんする事前の検討は、両教材の改善のためには不可欠の前提作業といえる。

『日本政治思想』の制作過程には、研究会構成メンバーの他に、多くの異なる領域の専門家の方々が参加した（資料2「まえがき」参照）。そのことが両種教材の内容を著しく豊かにしたことは疑いないが、決定的に大きな役割りを果たしたのは、いうまでもなく主任講師であった。全体構想の提示に始まり、その後の執筆、編集、番組制作の過程におけるさまざまな協働を可能にしたのは、主任講師の熱意と一貫したイニシアチヴに負うところが大きかった。諸外国の遠隔教育機関では通例であるコースチーム方式ではなく、現行の教材制作システムに相乗りした形の研究会としてはスムーズに推移し、結果も豊かだったと考えている。（しかし、研究会と両教材制作に要した日時は1年にみたく、時間不足は如何ともしがたかった。）

前項末尾に述べたように、印刷教材、放送教材とも評価のための客観的基準なるものが見出せず、状況証拠に類する引用ばかり多い非分析的な記述に止まった。諸方面からのご批判・ご教示を切に望みたい。

#### （後 記）

教材の編集・制作過程を研究会に組み入れるという微妙かつ煩瑣な試みに快く応じて下さった主任講師松沢弘陽教授のご厚意には感謝の言葉もない。教授は『日本政治思想』に限ら



ず、つねに放送大学の教材一般にたいして広い視野からの批評・助言を惜しまれず、私共にとって教えられる点が多かった。教授はまた、同ラジオ講義の全文を当センター研究報告に掲載することを許してくださった。テキストと放送講義の比較検討が可能になるわけで、今後のラジオ科目制作にさいして貴重な参考資料となることが期待される。

また、資料の朗読について献身的な協力を惜しまれなかった江藤文夫成蹊大学教授にたいして、厚くお礼申し上げる。

なお、当センター側の研究会参加者は、岩永雅也（当時、現在放送大学）、島田裕已、田代和久、内埜政芳（ディレクター）、多田、の5名であった。

#### <参考文献>

- 天城勲(1984)「映像と印刷教材の組み合わせに関する比較研究 — 生化学の場合(発言)」『MME 研究ノート』No.6
- 大学放送教育学習方法研究会(1983)「放送テキストを執筆される方へ：中間案」
- E.デール(1957)西本三十二訳『デールの視聴覚教育』日本放送教育協会
- R. Escarpit(1973), *L'Écrit et la communication*, P.U.F. 末松寿訳(1988)『文字とコミュニケーション』白水社
- H.U. Grundin, Radio, In A.W. Bates (Ed.), *The Role of Technology in Distance Education*, Croom Helm Ltd.
- B. Holmberg(1985), *On the status of distance education in the world in the 1980's*, Fern Universität
- 放送大学(仮称)設置に関する調査研究会議(1964)『放送大学(仮称)の基本構想』
- 細谷俊夫(1980)『教育方法：第3版』岩波書店
- 岩永雅也(1989)「新時代への賭け——放送大学の現状と課題」『放送教育開発センター研究紀要』第2号
- 村田良一(1979)「ラジオ」大内茂男他『視聴覚教育の理論と研究』日本放送教育協会
- 大塚雄作他(1987)「付録：自由記述にみる学生の意見の抜粋」『遠隔高等教育の学習者像』放送教育開発センター
- D.J. Power(1987), *The Use of Audio in Distance Education* (Paper prepared for CIDA-AMIC Seminar on: Training Needs in the Use of Media for Distance Education in Asia)
- 社会教育審議会教育放送分科会(1961)「放送大学における授業番組および印刷教材のあり方について」
- 白石克巳(1989)「遠隔高等教育における印刷メディアの意義」『長谷川仏教研究所研究紀要』第16号
- 島田裕已(1988)「テレビ・ラジオ・印刷教材の教育効果比較研究〔要約〕」『十年のあゆみ』放送教育開発センター
- 島田裕已・秋山淑子(1988)「世界の遠隔教育機関の概要(1)」『MME 研究ノート』No. 50
- 多田方(1988)「遠隔高等教育における印刷教材の構造——英米の事例を中心に」『放送教育開発センター研究紀要』第1号

## 資料1：検討事項

### [1] 全体を通じるねらい

(「まえがき」「第1回」を通じて)

1. 戦後民主主義と日本国憲法の先行者たち
2. その時代、人と生涯(政治および思想とのかかわり方)、思想と著作
- 3-a. <政治の貧困>と政治の世界における<哲学の貧困>を衝く  
<事実>(個別利益のバラマキ、法による強制)の力による支配  
<事実>をこえ、<事実>をしばる<哲学>の貧困  
<貧困な哲学>に対して政治の<哲学>をきずくことによって戦う
- 3-b. 政治の<哲学> 私と公、個と全体; 利と義; 立憲制・議会制を支える法以前の原理
4. これら過去の先行者たちの思想を学ぶ意味  
現代と歴史との対話(国際化の時代における豊かな経済と貧しい政治)  
思想における「進歩」と「陳腐」

### [2] 印刷教材・放送の形態、両者の関連

1. 印刷教材
  - a. 写真、図、マンガ(歴史的)、歌曲の詞・楽譜(?)
  - b. はじめに全15回の構成・見通しについて説明  
終わりに結び、全体として何を学ぶか  
各章ごとに、狙い、全体との関連、まとめ  
各章・各節の表題とサブタイトル、小見出しに工夫
  - c. 各時代の個性を現代人にわかりやすく

くする(e.g.参政権、生活水準など)

儒教の影響、大日本帝国憲法——他の講義との関係について

- d. テーマをしばる
  - e. 明治・大正の歴史が今日にも通じる意味をもっていること
  - f. 文献——高校教科書、他の講義の教材、基本的なりファレンス
  - g. 楽しむこと——テレビ、映画、文学作品、<思想史を歩く>(e.g.福沢、蘇峰、田中正造、吉野作造)
  - h. 組み方 余白をとる
2. 放送
    - a. 印刷教材を予め読んでおいてもらう
    - b. 時代を現わす演歌(自由民権)、流行歌、労働歌など(cf.添田知道『演歌の明治大正史』)  
引用史料の朗読  
質問と答え(同席?)
    - c. 印刷教材の要所の説明  
放送用の原稿、脚本(?)
  3. 両者の関連  
印刷教材先行(?)

### [3] 章・節の編成と15回への配当

1. 章・節の編成と放送回との関係(e.g.中江兆民の場合)  
各回ごとに一応のまとまりをもたす
- 2-a. 全体を政治の<哲学>の共通主題で貫いていく
- 2-b. 個々の人物間の影響関係、意味連関に注意する(e.g.田中正造、河上肇)
- 2-c. 対比によって問題を浮きぼりにする(e.g.2章1節、2章2節と3節、3章、4章、5章)

### [4] 全体篇別案(章と節)

## 資料2：まえがき

1989年度からの「日本政治思想」では、明治の啓蒙から大正デモクラシーまで、今からほぼ120年前から60年前までの時代の政治思想を学びたい。この時代のどのような思想を

とりあげるのか、それはなぜかなどについては、「序論」で説明する。半世紀余りは、対象とする時間の幅としては、長いとはいえない。それでも、とりあげる先人たちとゆっくりと

深い対話をしようとするれば、15回という枠はかなりきつい。したがって政治思想の歴史的な背景については、各章の初めに簡単にふれるにとどめた。そのほか、それぞれの時期の世相や政治が一般民衆にどのようにとらえられていたかを物語る史料として、その時期の諷刺画や政治漫画を紹介した。しかし、やはり政治史の社会史的な背景についての説明はごく限られているので、「日本政治史―外交と権力―」〔特にこの講義の範囲である時代をとりあつかう第3～11章〕の印刷教材と放送を併用して学んでいただきたい。また、この講義では大日本帝国憲法が政治論の争点としてかなり大きな比重をもつが、「憲法概論」（基本・基礎科目）の第2章は帝国憲法をあついているので、参照されればこの講義の理解に役立つであろう。

放送は、印刷教材をひと通り読まれたことを前提にして、なるべく印刷教材のくり返しにならぬように進めたい。印刷教材を前もって通読した上、各回の分を再読して、聞いていただければ、印刷教材も放送も、いくらかでもわかりやすくなると思われる。放送について、特に音声でなければ伝えられぬことがらとして工夫してみたのは、次の二つである。

第一、演歌、労働歌。それぞれの時期の政治的・社会的状況を構成する大きな要素の一つは、民衆の政治や社会の状況についての意識である。この講義でとりあげる人々も、程度のちがいはあれ、民衆意識の動向に促されて発言し、民衆に語りかけようとした。そのような民衆意識をよく表現するのは、演歌・講談・芝居・浪花節などの民衆芸術・民衆娯楽である。事実、演歌や政治講談・壮士芝居などは、自由民権運動の大衆化の中で生み出されたものであった。このような民衆芸術・民衆娯楽の中で、最もポピュラーなのは演歌であろう。演歌の歌詞だけでなく節まわしや伴奏のしかたなども、それぞれの時期の雰囲気をよく伝えている。この講義では、そのような意味で演歌と労働歌の紹介をこころみ（放送各回の終りに、歌詞の全部あるいは一部を、「参考資料」としてのせた。ただしのせた分のさらに一部だけを演じる場合もある）、この分野に詳しい作曲家竹田由彦氏に解説をお願いし、東京演芸協会会員の福岡詩二氏に

演じていただいた。その他、第2章（放送第4回）の「民権かぞへ歌」と「よしや武士」は、NHK 高知放送局の協力により、発祥地高知のこの歌を知る方に演じていただいたほか、歌の歴史的背景などについて、お話をうかがうことが出来た。また第6章（放送第14回）の「メーデーの歌」は、NHK 所蔵のレコードによった。

第二、テキストの朗読。思想はそれを表現することばと切り離せない。ことばは、書き読む以前に、語られ話される。明治の早い頃には、書かれた文章も多くの場合、声を出して朗読することを念頭において書かれた。そのような態度はその後まなお続いていた。この講義でとりあげた人々は、福沢諭吉を筆頭として、このような思想とことばの問題に深い関心をもっていた。思想が考えぬかれて深いほどそれを語ることばは明晰で力強いし、思想の豊かさはことばを美しくするであろう。この講義に登場する人々は、文章家のタイプから最も縁が遠い田中正造までを含めて、美しい日本語の文章を残した（長いアメリカ生活の間に日本語が下手になった片山潜は例外）。この講義では、それぞれの先人の思想を理解する手だてとして、書き記された文章の朗読をこころみた。この問題と長くとりくんでこられた江藤文夫氏の御指導のもとに、稲垣隆史（劇団民芸）・水原英子（劇団民芸）・小柳恵（山本安英の会）の3氏に、また中江兆民の『民約訳解』のオリジナルであるルソーの『社会契約論』のフランス語原文は、ジャン＝マルク・ポティエズ氏（放送教育開発センター外国人研究員）に、テキストを朗読していただいた。

この講義を準備するについては、多くの方々の助けを得た。すでに名前をあげた方々のほか、放送教育開発センターの研究会の、検討のケースとしてとりあげられ、一般の教科書とはちがう教材としてのあり方について、数回にわたって有益な意見をうかがい、特に、放送のプランを具体化するについては、ゆきとどいた協力をいただいた。また、放送大学教材作製部会の援助をうけ、北海道教育大学の菊地久氏、北海道大学法学部の中村敏子・萱野智篤・小原薫の3氏の参加をえて研

究会を行い、印刷教材について貴重な意見をいただいた。諷刺画・政治漫画の調査については、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫の北根豊氏の手をわずらわした。NRC ハンデルスブラット紙特派員の K. ウォルフレン氏には、著書原稿を刊行前に読ませていただき、放送第 1 回のために、対談をお願いした。

これらの方々の助けを得ながら、この講義は未熟なものにおわっているが、それにもかかわらず、読まれ聞かれる方々の、主権者である国民としての政治的成熟のために、いくらかでも役立つことがあれば、願ってもない喜びである。

### 資料 3：『日本政治思想』にかんする学生調査

(数字：パーセント)

- |   |      |  |      |
|---|------|--|------|
| Q 1. 印刷教材の内容は、むずかしいと思われますか。一つだけ○をつけてください。                       |      | a. 関連科目との関係  | 22.7 |
| a. むずかしすぎる  | 0    | b. 各回ごとのまとめ  | 33.3 |
| b. 理解できない点がある   | 26.3 | c. 専門用語の解説   | 36.4 |
| c. だいたい理解できる  | 44.7 | d. 練習問題  | 3.0  |
| d. 充分理解できる  | 23.7 | e. その他 ( )   | 4.5  |
| e. やさしすぎる   | 5.3  |  |      |
| Q 2. 印刷教材の分量 (ページ数) は、内容に比して適当と思われますか。一つだけ○をつけてください。            |      | Q 6. 一般的に放送番組の内容は、印刷教材との関連上、次のどれにあたるのが好ましいとお考えになりますか。一つだけに○をつけてください。                     |      |
| a. 多すぎる   | 0    | a. 印刷教材の内容にほぼ重なっている  | 7.9  |
| b. やや多い   | 15.8 | b. 印刷教材によるも、異なった視点から説明される  | 31.6 |
| c. 適当である  | 76.3 | c. 印刷教材中の重点項目の解説になっている   | 42.1 |
| d. やや少ない  | 5.3  | d. 印刷教材の要約的な説明になっている   | 10.5 |
| e. 少なすぎる  | 2.6  | e. 印刷教材の内容と直接的な関連がなくともよい   | 7.9  |
| Q 3. 印刷教材に政治漫画を多く収載したしたが、学習上どういった効果を感じられましたか。一つだけ○をつけてください。     |      | Q 7. 講座の狙い (科目の学習目標)、具体的な学習方法などを把握するのに、次のどの方法によりましたか。一つだけ○をつけてください。                      |      |
| a. 時代背景の理解に役立つ  | 63.2 | a. 事前の案内などによる  | 23.7 |
| b. 内容に対する興味をそそる   | 28.9 | b. 印刷教材の「まえがき」、「序」による  | 26.3 |
| c. 講義の息抜きとして有効  | 2.6  | c. 放送番組の第 1 回による   | 5.3  |
| d. それほどの意味がない   | 2.6  | d. b、c の双方による  | 36.8 |
| e. この種の配慮は不要である   | 2.6  | e. 情報不足で、はっきり把握できなかった  | 7.9  |
| Q 4. 印刷教材に思想家たちの肖像写真を収載したしたが、学習上どういった効果を感じられましたか。一つだけ○をつけてください。 |      | Q 8. 放送番組のなかで、専門家が印刷教材中の資料朗読を行いました。学習上どのような効果があったとお感じですか。適当と思われる項目に○をつけてください。(いくつでも結構です) |      |
| a. 思想家に対する親近感を高める   | 55.3 |  |      |
| b. 内容に対する興味をそそる   | 28.9 |  |      |
| c. 講義の息抜きとして有効  | 7.9  |  |      |
| d. それほど意味がない  | 7.9  |  |      |
| e. この種の配慮は不要である   | 0    |  |      |
| Q 5. 印刷教材はページの上で制限がありますが、次の中で学習上不可欠と思われる項目には○をつけてください。          |      |  |      |

a. 肉声による生まの感覚を経験できた	36.8	c. 講義の単調さが救われた	15.8
b. 古典の内容を再認識できた	36.8	d. それほど意味がない	5.2
c. 講義の単調さが救われた	17.5	e. その他 ( )	3.4
d. それほど意味がない	7.0	Q10. 放送番組、印刷教材を通じて、この講義は、学習を進める上で効果的に作られているとお考えですか。一つだけ○をつけてください。	
e. その他 ( )	1.8	a. そう思う	41.6
Q9. 放送番組になかで、専門家が政治演歌や労働歌を歌いましたが、学習上どのような効果があったとお感じですか。適当と思われる項目に○をつけてください。(いくつでも結構です)		b. ややそう思う	33.3
a. 音声メディアの特性を認識できた	31.0	c. どちらともいえない	22.2
b. 時代背景の理解に有益であった	44.8	d. あまりそう思わない	2.8
		e. そう思わない	0

調査時期 平成元年 6 月下旬

調査対象 同年 1 学期受講生 (70 名)

回答者 38 名 (回答率 54.3%)

<内訳>

	(男)	(女)
20代	5 名	4 名
30	7	1
40	5	1
50	2	1
60	8	
70	2	
不明	1	
30	7	(年齢性別不明 1)

<平均年齢>

男	46.8 才 (年齢幅 21~70 才)
女	32.7 才 (同 22~51 才)

(研究開発部教授)